

《調査報告》催事用琉装国王・王妃衣装製作仕様調査

上江洲安亭¹

I. はじめに

催事用琉装国王衣装・王妃衣装の製作事業にあたって、令和5年度より根拠作品の事例調査や製作技術者に関するヒアリング等を行った。本事業は沖縄電力創立50周年事業の一環として沖縄電力から助成をして頂き、沖縄美ら島財団が根拠作品等の調査を行い、仕様を確定後、製作を行うものである。

II. 事業内容

催事用琉装国王衣装・王妃衣装は、首里城公園が開園後に製作され、催事等で活用されてきた。しかし、2019年10月19日の首里城火災で焼失してしまった（図1・2・3・5）。本事業では焼失した琉装国王衣装・王妃衣装を製作することを目的としている。ただし1992～1993年当時首里城祭実行委員会が主体となって製作事業を行っていたようで、衣装の製作仕様の詳細な報告書等の記録は残っていなかった。衣装の製作者や、根拠とした作品事例について一部残っていた情報に基づきながら事例調査や製作が可能な技術者について調査を行った。

III. 琉装国王・王妃衣装の前回製作者

国王衣装

衣装の形態	図案等	製作者	材質	備考
ハチマチ	金入黄地五色浮織冠 首里花織	ルバース・ミ ヤヒラ・吟子 * ¹	絹	* ¹ 県指定無形文化財保持者
国王衣装	繻珍龍紋（蟒緞）	不明。布地は 国外製作か	絹	
琉装帯	紺地鳳凰牡丹梅桜菊 模様	不明	絹	

¹ 沖縄美ら島財団 首里城公園管理センター 首里城事業課 副参事（博士（芸術学））

王妃衣装

衣装の形態	図案等	製作者	材質	備考
打掛	黄金色の福木染。首里花織	宮平初子* ¹ ルバース・ミヤヒラ・吟子* ²	絹	*1 国指定重要無形文化財 *2 県指定無形文化財保持者
紅型衣装	桃色地鳳凰瑞雲模様	玉那覇有公* ¹	絹	*1 国指定重要無形文化財

国王・王妃衣装の製作者・仕様の概略等は上記の表の通りである。国王衣装・帯の製作者は不明である。首里織の打掛・ハチマチの金入黄地五色浮織冠の製作者は宮平初子（国指定無形文化財保持者）、ルバース・ミヤヒラ・吟子（県指定無形文化財保持者）であったが、すでに物故されている。紅型衣装は玉那覇有公氏（国指定無形文化財保持者）であった。

IV. 製作技術者へのヒアリング

①打掛の王妃衣装・ハチマチ（金入黄地五色浮織冠）

打掛の王妃衣装及びハチマチ（金入黄地五色浮織冠）は、製作者の宮平初子・ルバース・ミヤヒラ・吟子が物故しており、製作工房も閉所していた。そのため那覇伝統織物事業協同組合の協力を得て、遺族と面会を行い、現存している根拠資料についての調査を行った。王妃衣装・ハチマチの織図は残っていなかったが、双方とも見本裂が残っていた（図4・6）。面会に尽力して頂いた那覇伝統織物事業協同組合の仲介により確認した見本裂・写真等の製作に必要な資料について遺族から借用して頂くことを了解してもらった。

見本裂等の確認を行った後、改めて遺族とのヒアリングに協力した那覇伝統織物事業協同組合と製作仕様・体制について確認を行った。組合には、旧宮平工房出身の技術者も多く所属しており再度製作することは可能であることを確認した。

また本事業は、近世琉球期の製作技法の解明を主眼とした復元模造事業とは若干違い、催事用衣装の製作であることから伝統的な工法は尊重しつつ、色材等は天然染料の色調を合わせながら堅牢度の高い染料（化学染料も含めて）に使用を検討することとした。

②紅型衣装

紅型衣装については、玉那覇有公氏の玉那覇紅型工房を子息の玉那覇有勝氏が引き継いでおり、玉那覇有勝氏にヒアリングを行った。当時製作に使用した型紙（図7）や見本裂が残っていたことを確認した（図8）。現存している型紙や見本裂に基づきながら、新たな製作が可能であることを確認した。

玉那覇有勝氏とのヒアリングでも、焼失前の衣装が首里城公園の催事等で見学した際に、製作当初より退色している印象を得ていたとのことで、色調は臘脂等の伝統的な色調を尊重しながら堅牢度の高い色材（化学染料を含む）の仕様も検討してはどうかと助言を頂いた。また催事用であることから、演者の汗等で、紅型で染めた面が痛まないように裏地を入れた衿衣装にしてはどうかとの助言も頂いた。

実際に、平成の衣装も裏地のある衿衣装であった。

③衣装縫製に関するヒアリング

国王・王妃衣装の縫製については、以前蟒緞による催事用唐衣裳の縫製を行った実績のある技術者が所属する組踊道具・衣裳製作修理技術保存会にヒアリングを行った。

王妃衣装については、琉装衣装とした際でも、実際に着用時に着付けを行う技術者の意見も反映させてから縫製に臨みたいとの意見を頂いた。

国王衣装については、蟒緞を衣装にせず、そのまま反物の状態で現存している「茶地繻珍布」の全体画像に基づきながら、どの部分が琉装衣装に使用されたかのシミュレーションを行った。

④有識者ヒアリング

王妃衣装製作については、祝嶺恭子氏（沖縄県立芸術大学名誉教授。国指定無形文化財保持者）にもヒアリングを行い、意見を賜った。聴取した意見は以下の通り。

- ・福木は戦前の本土の研究者が沖縄で使用していたと報告しているが、琉球王国時代の染織品の事例には少ないように感じる。
- ・福木はカビ等が生えやすいデメリットもある。琉球王国時代に使用された黄色染料を考慮に入れながら、堅牢度の高い染料を選ぶ必要がある。
- ・今回は催事で着用することを考慮に入れる必要がある。色材まで厳密に同じとする模造復元とは違い、劣化に強い染料を使用した方がよい。
- ・化学染料も視野に入れて検討してもよいと考える。ただし化学染料で天然染料の色と合わせるのは難しい作業でもある。
- ・良い事例として沖縄県立博物館・美術館の常設展示の役人の衣装が化学染料を使用している。

V. 事例調査

①金茶地蟒緞衣裳（沖縄県立博物館・美術館所蔵）

前回、琉装国王衣装を製作した際に、最も根拠作品としたと思われる金茶地蟒緞衣裳の事例調査を2回行った。1回目は、現在も使用している国宝となっている「赤地龍瑞雲嶮山文様繻珍唐衣裳」を再現した催事用唐衣裳（二代目）の製作実績を持つ技術者に

同行してもらい織技術の確認を行った。本作品は七枚縹子で織られていることが分かった。

2回目の調査はプロカメラマンにより高精細の画像を撮影して、今後衣装製作に欠かせない図案検討の基礎資料とした（図9）。

②茶地縹珍布（沖縄美ら島財団）

茶地縹珍布（図10）は、沖縄美ら島財団所蔵資料で、財団職員により過年度に七枚縹子で織られていることが確認されている。琉装国王衣装製作に関する事例調査は2回行った。本作品は近世琉球期の史料では「蟒緞」と記録される反物で清朝からの進貢貿易で北京まで琉装使節を派遣できる進貢の年に毎回二段下賜されることが慣例化していた。国宝となっている「赤地龍瑞雲嶮山文様縹珍唐衣裳」も、この布地で衣裳を製作している。本作品は現在まで下賜された時のまま反物として残り、状態に変更を加えられていない作品である。そのため今年度1回目の事例調査は製作時の色調を最も残している可能性があることから色調の記録確認作業を行った（図11～21）。

2回目の調査は金茶地蟒緞衣裳と同じくプロカメラマンによる高精細画像の撮影を行った。特に本作品は幅78.0cm、長さ603.0cmの長尺の反物であるため、1カットで全体の記録撮影は難しい。複数カット撮影を行い、データを合成し一枚の画像として図案検討のための基礎資料とした（図22）

撮影時の調査で正龍が織られている二か所の上部に糸で位置の確認をするための印しが残されていたことが分かった（図23・24）。おそらく衣裳に縫製した際に、肩山になる部分の確認として印しがあったものと思われる。

VI 製作検討委員会の実施

製作技術者へのヒアリング、事例調査で行った情報を整理して、有識者による製作検討委員会を行った。委員会に招聘した委員は以下の通り。

委員	役職等	専門分野	備考
田名真之	元沖縄国際大学教授	歴史学	
與那嶺一子	沖縄県立博物館・美術館主任学芸員	染織	
山田葉子	那覇市歴史博物館主任学芸員	染織	類似事例所蔵館協力委員を兼ねる。
類似事例所蔵館協力委員			
篠原あかね	沖縄県立博物館・美術館主任	美術工芸	

製作検討委員会で議論された主な議事概要を以下に記載する。

- ・これまでの調査研究及び本事業で行った原資料調査で判明した知見は積極的に製作仕様

に取り入れる。

※国王衣装の龍の配置や地色の色調などは事例調査で得られた新たな知見を活かす。

- ・王妃衣装のように、そもそも現存資料や、往時の絵図資料が無いなどの根拠資料がほとんどない場合は、平成の製作仕様の前回踏襲とする。
- ・衣装の使用目的が催事時の着用であることから、屋外での着用を考慮した製作仕様とする。
- ・製作体制は、本事業で製作する国王・王妃衣装の製作仕様の大部分が前回と類似することとなることから、紅型の型紙・見本裂等の製作にかかせないデータが残されている前回製作の工房・製作団体を中心に実施し、効率的に製作を行う方がよい。
- ・ただし将来に向けた人材育成も視野に入れて次世代の担い手をなるべく参加させることを留意するとした事務局の意見も了承された。
- ・今後は、国王衣装の縫製を行う技術者と沖縄県立博物館・美術館所蔵の金茶地蟒緞衣裳の採寸調査を早期に行いたいと提案して、県博物館班の與那嶺・篠原委員からも協力の了承を得た。

まとめ

前回製作仕様の整理を行い、前回製作者を中心とした製作技術者ヒアリング、有識者ヒアリング、事例調査を行い、その成果を製作検討委員会で確認してもらった。本事業は、まだ製作仕様に関して確認しなければならない事項が多々あるが、次年度以降も検討委員や県内を中心とした地域の製作技術者、類似事例所蔵機関との連携を行いながら事業を進めていきたいと考える。

図 版



図 1 琉装国王衣装

清朝から下賜された蟒緞を琉装衣装として国王衣装とした設定となっている。首里城火災で焼失。

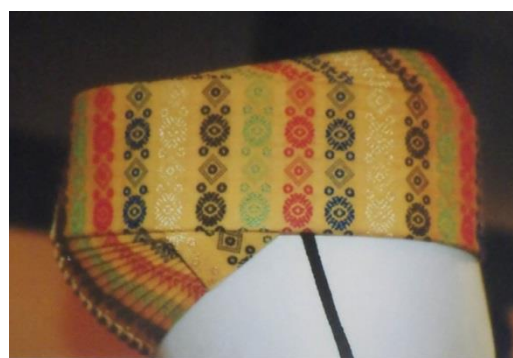


図 2 ハチマチ（金入黄地五色浮織冠）
故ルバーズ・ミヤヒラ・吟子が製作
首里城火災で焼失。



図 3 国王帯

紺地に鳳凰・牡丹・梅・桜・菊等の模様が織られている。製作地・製作者は不明。首里城火災で焼失。



図 4 ハチマチの見本裂
織図は残っていないが、見本裂の現存が確認できた。



図5 王妃衣装

打掛は首里花織。福木染。

故宮平初子製作（製作後、国指定無形文化財保持者（人間国宝）となる。）

紅型衣装は桃色地鳳凰牡丹模様。

玉那覇有公氏製作（製作後、国指定無形文化財保持者（人間国宝）となる。）

首里城火災で焼失。



図6 打掛衣装の見本裂

織図は残っていないが、見本裂の現存が確認できた。



図7 紅型衣装の型紙

前回製作時の型紙。同じ型紙を使用することにより、前回製作を正確に再現することが可能であり、さらに新たに型紙製作を行う必要がなく、効率的に製作を進められる。

玉那覇紅型工房所蔵

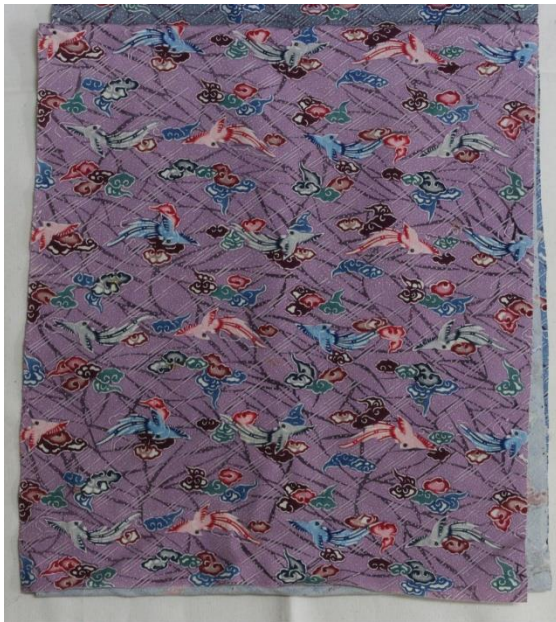


図8 紅型衣装の見本裂

前回製作時の見本裂。前回色調の参考となる。

玉那覇紅型工房所蔵



図9 金茶地蟒緞衣裳

前回、琉装国王衣装のモデルとして参考にしたと思われる事例。

沖縄県立博物館・美術館所蔵



図 10 茶地繡珍布

清朝から下賜されて反物のまま現存していることから、最も退色は少ないものと思われる。

沖縄美ら島財団



図 11



図 12



図 13



図 14



図 15



図 16



図 17



図 18

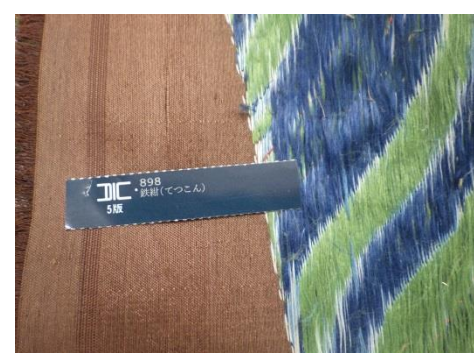


図 19



図 20



図 21

図 22 茶地繡珍布全体合成画像
法量：幅 78.0cm 長さ 603.0cm
沖縄美ら島財団所蔵

長さ 603.0cm の反物であるため、1 カットで全体撮影を行うことができないことから、数カットに分けて撮影して合成を行った。



図 23

図 23 図 24 の正龍
正龍の上部に糸で印しがなされている。衣装の肩山の位置を示していると思われる。



図 24